

# 河北新報 登米・栗原版1周年 インタビュー

移り住んだからこそ見えるその地域の姿がある。魅力は？ 活性化に何が足りないのか。「地域密着」を目指して誕生した「河北新報 登米栗原」版が満1歳を迎えた。創刊1周年を機に、新天地として登米、栗原を選び移り住んだ2人に「地域」について語ってもらった。登米祝祭劇場館長の山田悦且さん(54)とNPO法人「グリーンせみね」元理事長の小山公志さん(79)。

インタビューには、地域を元気づけるヒントが盛り込まれている。

(登米支局・村上俊、栗原支局・古閑長行)

## 登米祝祭劇場 館長

### 山田悦且さん(54)

「登米市に移り住んだ理由は何かですか。」

「新聞記者として旧道町に赴任した25年ほど前、ラムサール条約指定の登録湿地に向けて動きだしていた伊豆沼・内沼を取材したのがきっかけ。自然保護や環境問題

に興味を抱き、将来は沼を訪れる冬鳥たちの近くで暮らしたいと考えました。」

「登米市の魅力は何でしょうか。」

「広い空と大地が素晴らしい。1年を通じて生の営みを見せてくれる

伊豆沼の奥深さ、雄大な北上川に魅せられています。新緑の山々や清流といった日本の原風景が残っている。おいしいコメと野菜など食材に恵まれた地域。律令国家と向き合った勇敢な古代蝦夷の未裔(まつえい)の地としての

歴史ロマンにも引かれま

「住民との交流で何かを感じることはありますか。」

「暮らしていく必要なもの

大きいのが、登米市としてのイメージは打ち出せていないのが現状です。市や都部に比べて、地場産品の販路拡大を模索するとともに、地産地消による『全市民PR』が不可欠。地元の人材が素材の価値を理解し、愛し続けることが大切です。地元で背を向けられたものを売り出せるはずがありません。」

「人材も必要です。起爆剤となり得るのは『若者』。『よそ者』『ばか者』。『ばか者』とは、ばかげたように見えることでも打ちこみ、ばかと言われようとする

「以前赴任した山梨県富士吉田市は、多くの市民が屋にうどんを食べ、食文化を築き上げました。30年ほど前の喜多方市は朽ち果てそう古い蔵ばかりが目立ち、目ぼしい名物もなくて閑散としていました。それを逆手にとって蔵とラーメンを組み合わせることで地域おこしに成功しました。」

「登米市でまちづくりのキーワードを見つける」とすれば、何ですか。

「農業、古代ロマン、自然は大きな要素。これらを『郷愁』や『田舎体験』などのテーマで組み合わせる産業が、登米市を売り出す柱になるのではないのでしょうか。みんなが地域を見つめ直し、キーワードを探す作業が重要です。」

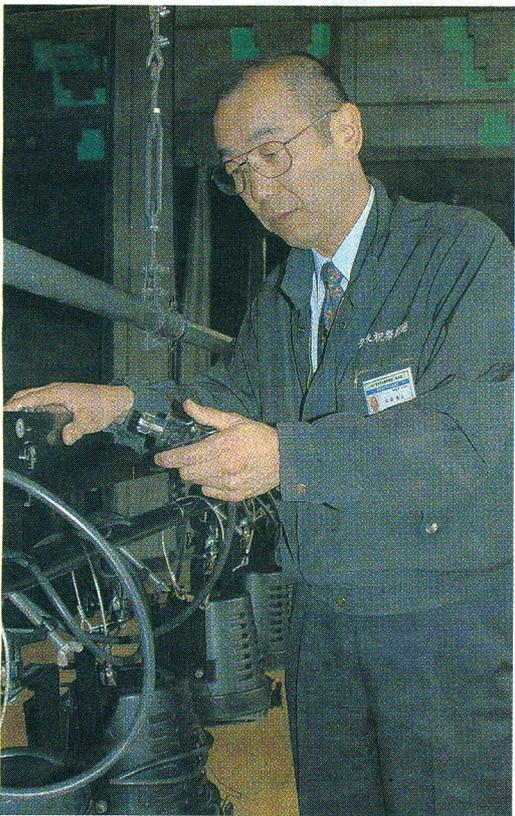
「河北新報 登米・栗原」に対する意見、要望を聞かせてください。

「地域密着型の人間味あふれる記事は面白く読んでいます。『隠れた一品』『隠れた一景』など、知られざる地域の宝をぜひ紹介してほしい。行政が前に出る話題は少ない。地域掘り起こしのヒントを提供してほしいです。」

# 山河に日本の原風景

やまだ・よしかつ 1963年福島県伊達郡川俣町生まれ。新聞記者だった94年、伊豆沼のほとりに自宅を建て妻と息子が先に引っ越し。赴任先の東京や神奈川県などから1回ほど「帰宅」し、2002年の退職と同時に自らも移り住んだ。登米文化振興財団事務局長を兼任。歌人。登米市追町の自宅に妻と2人暮らし。

「伊豆沼のブランドは物」がたくさん点在している土地なのに、そのすばらしさに気付いていない部分もあるよです。地域を元気づけるには何か必要ですか。



劇場の舞台装置を点検する山田さん。「地域づくりに夢中になる『ばか者』が増えてほしい」

## 情報発信力 強化が課題

先頭に立って動く熱意のある人という意味です。」

「人材について現状はどうでしょうか。」

「地域を面白がって何かしようという人は存在していても、線や集団にはなっていない気がします。もっと地域づくりに

「地域密着型の人間味あふれる記事は面白く読んでいます。『隠れた一品』『隠れた一景』など、知られざる地域の宝をぜひ紹介してほしい。行政が前に出る話題は少ない。地域掘り起こしのヒントを提供してほしいです。」